

華北の山野かけある記

②

清原 清人

この町は わりににぎやかな町で わが軍の中隊本部があった。中隊長にあって挨拶をすませ 係の下士官に宿舎の割当をしてもらい しばらくの管内生活に入る。治安は昨年比して著しくよくなっており 警備には日本軍が当らなくとも 中国自衛隊でまかうとのことで 20名の自衛隊を雇用することにした。隊長にはデッパリ肥った人のよさそうな40男の少尉さんが来てくれた。いざという時には役に立つとも思えないが 敵に寝返りをうつような悪い男とは思えなかった。いよいよ調査に出発する朝 営庭にあるトラックの前まで来たとき 並んでいた自衛隊が少尉殿の号令と共に捧銃をして迎えてくれたのは 当方がまごついてしまって あわてて拳手の礼で返したりした一幕もあったが なれてくると自分も兵隊になってしまって至極当然な行事の如く 朝夕拳手の礼をするのが少しも気にならなくなりました。

S君は東京育ちで なかなか世馴れた男だったので 中隊長や指揮班の連中ともうまく馬を合わせてくれて管内の生活も至ってスムーズに運んだ。時折はいっしょに酒を飲んだりして 今までの管内生活ではここが一番居心地のよいものであった。

鉱床は昨年踏査しているので概略のことはわかっていて。 昨年はちょうど春の頃に杏子の花が真盛りで 北側に高い峰々の続いた南斜面の柔らかい日ざしの中に咲く杏子の花の下に立っていると この平和境がどうしてそんなに治安が悪いのだろうと不思議に思えたのであるが 週に何回かの戦闘が行なわれた所で まばらに点在する

農家もすべて焼打ちされて 屋根はなく 周囲の土煉瓦の壁だけがわびしく残っていた。ここは八路軍と日本軍の勢力の接線であったのである。しかし 1年余過ぎた今日では 八路軍も遂に後退したのである。 鉱床も一部で開発されつつあったそのために鉱床の形態を観察するのに真に便利であった。

鉱床は震旦紀の珪質砂岩よりなる山嶺の南側山腹に長く(略10数kmにわたるものとみられる)帯状に続いて長城を越し満州の熱河省に入っている。下部に低品位の含満頁岩ともいふべき10~20%内外のMnを含む頁岩層(厚さ10m内外)がありこれはよく連続する。その上部に同方向に並列して賦存される芋状の満頁岩がある。一つの鉱塊の大きさは2~3t内外から10数t内外のもので 地層の傾斜に沿って長軸があるのが奇異な感じを受ける。この鉱体ゾーンの上部は寒武紀の饅頭頁岩層で 風化侵蝕に対して弱く 上盤に続く珪質石灰岩や珪岩層と下盤側の震旦紀の珪質砂岩層との間に特長のある軟部を形成して連続するので 遠くから眺めてもよくその連続状況を知ることができる。

思いもよらぬ程の平和で愉快的調査を終えて北京に帰った そのころちょうど内地から局の顧問であった地質調査所のY所長とK教授がお見えになっており H審査役から“報告会を開くから君は今度の調査の話をし給へ”と命ぜられた。口不調法の点では誰にも負けない私は 偉い先生方を前にして話すなどのことは 煮湯を飲むことよりもつらいことであった。もちろん何を話しているのか Y先生がどの顔かK

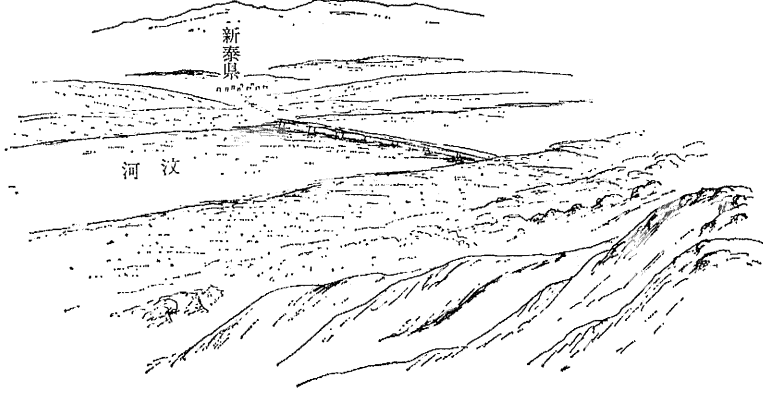
先生がどこにおられるのかお上気してしまっただけに見えよう筈もなかった。 そのうちにK総裁も出席された。 その偉大な体躯のみが私の印象には強く残った。 大臣でもやるような人は さすがに体力の点でも立派なものだわいと妙なところに感心したりした。そして今もお政界に活躍しておられる姿をテレビなどで拝見しては当時を思い出すのである。

7. 新泰炭田調査の思い出

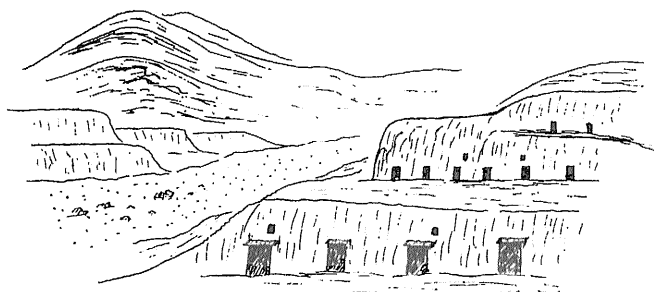
昭和18年の秋の頃であったと思う 調査地のあちこちに枝もたわわに色づいた藁が突っているのが 今もありありと目の前に浮ぶ 私は新泰炭田の調査を命ぜられ 測量のS君同助手のK君 それに通訳のR君を交えて4人で出発することになった。

新泰炭田というのは 私にはなつかしい所で 私が内地からきて初めて管理に当たった華豊 および華宝(後に赤紫)炭礦というのは この炭田を貫流する汝河の下流にあって ここに炭田があることはよく知られていたが 当時は敵地区で近寄ることはできなかった 当時の接收委員長であったSさんは古い同文書院の出で 学生時代に卒論の大陸行脚でこの炭田を歩いた経験があるとのことで 次のようなことを話された。新泰炭は優秀な強粘結炭であるが坑内で“流砂層”なるものに遭遇することがあって その層に当たると直ちに出水して排水設備の幼稚なこの地域の炭鉱は廃鉱の止むなきに至ると 最初はその意味がよくわからなかったのであるが“流砂”という字の意味と 炭田を貫流する汝河からおそらく 炭層露頭近くでは 夾炭層上部の不整合面上に河床の砂礫層があって 掘進中の炭層がたまたまその不整合面に顔を出した場合は 上部の砂礫と共に河水が侵入するのであろうと独り合点していたのであった。この私の想像は 当炭田では実際に観察することはできなかったが 後に内地に引揚げてから宇部炭田で略同様の不整合を見ることができた。

この地に入るには 津浦線を南下して汝河に沿う大汝口という駅から支線に乗り換えるのであるが この支線というのが実は私共の手で造ったのである。沿線に華豊 華宝という両炭鉱があり 日本語式に読むと音が同一のために何かと不便がおきていた。そこで 奥にある華宝炭鉱を 接收部隊名をとり赤紫炭鉱と改名した。部隊長はお気に召した様子で“鉄道が無くては石炭を出しても運び出せない 大汝口から赤紫まで鉄道をつくれ”という鶴の一声に 採鉱屋も事務屋も総動員で路盤工事を指揮した。人夫は軍の命令であるので 毎日何千人も集まり 敵の密偵も多数入込



新泰炭田付近



清涼寺山と鶯子頭部落

んでいると思われるので神経もつかれるし素人ばかりが集まっているので 橋梁などになるとまったくお手あげで 遂に専門の請負工事に出したりした思い出深い鉄道である。 其後 本格的に華北交通会社の手で建設され 赤峯から新泰まで延長されたのである。 この沿線の炭鉱にはM社が進出接収当時は畑の中にボツンと炭鉱の城壁のみがあって人家はなかったのであるが今度来てみると 駅前一带から旧炭鉱構内と思われる付近にかけて赤瓦の綺麗な社宅や商店 炭鉱事務所などの建物が立並び昔日の面影は少しもなかった。 数年前 小さな炭鉱城壁をたよりに 1コ中隊の兵隊と共に3000の敵に包囲されて1週間の間昼も夜も撃ちまくられて 恐ろしかった当時のことが夢のように脳裏に浮かんでくる。そして赤峯部隊の兵隊さん達も棗荘付近の戦場で大半が戦死されたことを思いだしたりして浮世の転変というものをしじみと感じたものであった。

新泰炭鉱もM社の経営で これは接収炭山ではなく新規に開発されたものであった。 この炭田調査は大正年間? に地質調査所のW技師によって調査され その報告書は既に絶版になっていたので 調査所の許可を得て局で複製され 私もその1部を持参してきたのである。 宿舎は炭鉱内の空室を借り受け そこに宿泊した。 治安は著しくよくなっていたので 自衛隊を雇うことにした。 この自衛隊が中食の時間になると民家に立寄り 代金を支払わずに饅頭などを供出させるので “必ず中食を持参せよ” と申し付けるが 馬耳東風である。 熟した棗の木の下では棗を取って食べ 落花生畑では生の落花生の実を掘っては食べる。 通訳のR君の説明によると彼等が中食を農民に出させるのは 役得と考えて至極当然なことのように考えている “自分達のお蔭で君等は土匪の略奪から守られているのだ” という考えに立っているというのであった。 仕方がないと思ったので 負担が多すぎるような農家には何がしかの礼金を出すことにした。 炭田は基盤の奥陶紀の石灰岩層が露出するほか

は きわめて露出の悪い地域で G層ばん士質頁岩と呼ばれる奥陶紀上部の不整合面にできた露天化残留物や夾炭層中の石灰岩層等が僅かに露出し 炭田の中央部は汝河の広い川原と河水で覆われる始末である。 このように露出の少ない だっ広い平地である関係もあるが W技師の地質図はすでに完全に描かれており修正する地点を探し出すのに苦労したというのが実情であった。

8. 大同炭田調査の思い出

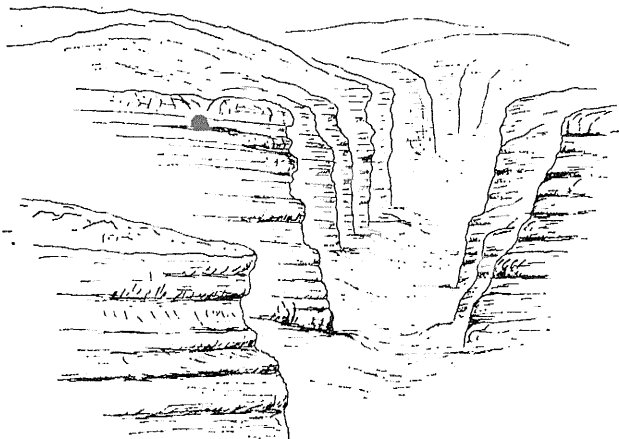
大同炭田の図幅調査は縮尺1万分の1で縦30cm 横幅40cm の広さのもので 私共の班長(課長)であるMさんが 満鉄調査部在職中から調査隊長として手がけられてきた。 私がこの図幅調査に参加した頃 約40図幅余が完成し30数部が印刷されていたように記憶している。

Mさんは この程度の進捗状況ではあと40年もかからないと炭田全体の図幅は完成しないと歎いておられた。 私が参加したのは17年と18年の2夏であったように記憶するが当時は食料事情が悪く 多人数の者が2カ月もの長い間 食べていくことは大変なことで 特に中国の自衛隊員20名余を雇用しなければならなかったし 彼等の食料を確保することが また 一苦労であった。 幸いに張家口支局のCさんが 何

かとお世話を下さったので無事に仕事を進めることができた。

張家口で絶えての庶務的な仕事を終え色々大同に乗込んだ。 大同でも2・3の問題があるので 支局のCさんも同行して Mさんの満鉄時代からの定宿山西旅館に控る。 Mさんの酒好きは有名すぎる程のものであったが Cさんもまた 剣道5段の堂々たる体軀の持主で左党であった。 いつものことであるが現地部隊の慰問品としてウイスキーを1打持参したのであるがCさんには米やメリケン粉等の食料確保に大変なお世話になったことでもあり “Cさん1本出しましょうか” というと 彼は笑いながら当然だといわんばかりに “なんだださんなどとはいわさんぞ” と高飛車である。 はて おかしいぞと思っていると彼は続けて “1本はもう空になっているぞ” という。 そういわれて気付いたのであるが 張家口旅館で1本飲んで 山に入ってから醤油の小出し用に便利であるという意見が出て 包装紙のない空瓶を一緒にしぼりつけていたのであった。 一同大笑いのうちに山西旅館の夜はふけていった。

さて調査基地の宿舎は早くから張家口支局の庶務係によって確保し補修されていた。 石仏で有名な雲崗の旧兵舎跡である。 この付近は至って治安のよい地域であるが 夜が危いというので自衛隊20名余と共に起居した 調査班の一行は 満鉄調査部から応援にきてもらった測量のA君ともう1人は東北弁の強い人だったが遂に失念して名前が思い出せない。 地質は同僚のH君と中国人地質家のR君 それに私と通訳のR君の6名である。 ところが暫くたって京大のM先生が学生2名を連れて実習にお出になり (後で知ったのであるが実は実習でなく勤労働員だったとか) 先生は直ぐご病気になられて入院してしまわれた。 学生のE君とK君をあずかることになり宿舎内にはぎやかになった。 それからまた暫くたって またまた北京大学(師



鶯の巣のある岩壁



塩池付近の景色

範大学だった?)の学生数名(4名?)が
実習にやってきて 山の中とも思えぬ程の
大にぎわいになってしまった。中国人地
質家のR君は回教徒で豚肉を食わないので
彼の料理は特製であった。ある日の夕食
のとき通訳のR君は茶目気を出して彼に豚
肉を食わしてやると力んで何とかだまして
食わしてしまった。さあ大変である。
口の中に入れれば豚肉と牛肉は味が違うので
彼は直ぐに見破ってしまつた。顔は見る
間に真赤になりものすごい勢いで通訳に
つかみかかろうとした。通訳はR君がそ
れ程真剣に怒るものと思っていなかったの
でにやにやしなながら禁を犯す彼を見てい
たのであるがあまりに真剣な態度にビク
リして室外に逃げ出した。それを見て
R君も追いかけてやろうとしたが皆が総立ちに
なって止めたので やつと事なきを得たが
中国青年の信仰に対する真摯な態度に驚い
たり 阿保らしいと思つたりしたことだ
った。次の年は 宿舎すなわち調査基地を
密子頭という部落に移した。農家を2・
3軒借上げてそこに起居することにな
った。この部落は大部分の住居が穴居で
黄土崖の側面に掘られた横穴である。私
共の宿舎もその1つであった。この横穴
は夏は涼しく冬は至極暖いそうである。
二階建? になったものもあった。

この横穴の部屋に入った最初の夜 電燈
のない真暗な部屋で寝ていると 何かむず
むずと小動物が身の廻りをはい廻って寝ら
れない。誰かが南京虫だとう。さて
はと飛び起きてローソクに火をつけて見て
びっくり 明るくなったので敵も一大事と
思ったのであろう。床の上から大急ぎで
壁に向つてはい上つていく その数のおび
ただしいこと。ローソクの火を壁面に寄
せるとぼろぼろと焼け落ちて床の上が真黒
になる程の軍勢であった。除虫剤を用意
して来なかった不用意さもさることながら
こんなに多い南京虫の大軍は見たことがな
いと皆が驚いた。習朝は早速大同の町に
出て除虫剤を買求めてきた。

ある日私は助手のK君 通訳のR君と3
人で宿舎の前の川向うにそびえる清涼寺山
というのに登った 山頂には清涼寺という

古めかしい寺があつて ラマ僧のような姿
の僧侶がいた。その僧侶とR君の通訳で
世間話をしているうちに 川上の空が真黒
になって ひどい雨が降っているのが目に
止まった。急いで山を降りなければ渡れ
ないようになるというので 3人は駆けお
りるように山を降りた。山麓に待たして
おいたトラックの中では運転手のI君が昼
寝でもしていたのか 下の川が洪水になっ
ているのも知らぬげにのんびりしたもので
ある。川岸まできてみると 平常は一滴
の水もなく 道路としてつかわれている川
でものすごい水勢で流れており 向う岸に
渡ることなど思いもよらぬ風情であつた。
しかたがないので水勢が衰えるのを待つこ
とにした。予想通り2時間とはたため間
に水量は減り 水勢もまた緩かになった。
もうよからうというわけでトラックに乗込
み川の中程までくると トラックは空回り
をはじめ川の真中で立往生をしてしまつ
た。もう水は引く一方だし 河中に置き
っぱなしにしたところで別段どうというこ
ともないだろうというわけで 皆トラック
から降りてズボンをまくって渡った。予
想通り夕方になると水はほとんど無くなり
車は砂礫の中に車輪の一部を埋めて立往生
していたのである。実に奇妙なこの付近
の川の生態を見て印象が強く残った。

またある日3人は高い崖の上で中食をし
ていた。前と右手には100mもあろうか
と思われる深い谷が入込んでその絶壁に縞
模様をなして砂岩と頁岩の互層が美しかつ
た。食事を早く済ました通訳のR君が双
眼鏡を手にして四方の景色を眺めていたが
突然“あそこ驚の巣がある”と けしき
ばんだ顔で双眼鏡を私の前に差し出した
見ると前の絶壁の上端から2mあまり下方
にあまり奥行きのない穴があつて其中に2
羽か3羽かよくわからないが鳩みたいなも
のがうずくまっている。R君はK君に出
しぬかれてはならぬと思つたのか“危いか
らよせ”という私の言葉も聞かず“俺が取
ってくる”と言い捨てて谷の上手に向つて
走り出した。あんな傾斜の急な岩壁をど
うしてあの穴まで降りることができよう。
しよせんあきらめて帰ってくるに違いない

と たかをくくっていたところ 穴の上方
の位置をこちらから見ているK君と合図し
合っていたが 岩につかまって腹這いなが
らも何とか穴までたどりついた。そして
何やら抱きかかえながら上に登ると一目散
に駆け出して来た。抱いているのは親鷄
ほどもある大きな雛で まだ白い産毛に包
まれた驚の雛であつた。興奮からさめぬ
R君は“もう1羽いたが 2羽は持てない
し 親鷄が帰って来たら大変だとこわくて
よく思案する暇もなかった。穴の中には
羊か山羊の骨が一ぱいあつた”という。
この雛の大きさからも大鷄であることは容
易に想像された。R君の顔をのぞき込む
ようにして聞いていたK君は立上りざま
“そんなら俺が取ってくる”と言って駆出
す 私は一雛去つてまた一雛といった具合
で“K君危険だから止せよ”と言つたが
若い2人が競争し合うことは今に始まつた
ことではなく R君が1羽とつてきたから
には自分も1羽とつて来よう。1羽残し
てきたR君に礼をいいたいくらいのものだ
つたらうから 私の言葉など耳に入る道理
はなかつた。再び数10分の気をもむ時間
が過ぎてK君も無事1羽の雛を抱いて帰つ
てきた。二人の顔は興奮とよろこびで話
もはずんでいた。早く帰つて2羽の雛を
入れる「オリ」を造らねばならぬという
ので 仕事は中止して宿舎に帰つた。

鷄は肉食であるので残飯などをやっても
見向きもしない。肉を買ってきてやると
雛とは思えない鋭さで直ぐに平らげてしま
う。これはたまらぬというので 自衛隊
に命じて野犬を撃つてくるようにしたが
1頭ぐらいの犬は3日ともたなかつた。
彼等は野犬探しに骨を借んで ついに飼犬
を撃つてくる始末で部落民から苦情が出た
りして この雛の飼育には骨を折つた。

またある日 張家口支局のK君が事務整
理という名目の慰勞出張で宿舎に来たので
あるが 其時張家口支社のNさんという老
人が一度調査地の様子を見ておきたいとい
うので同行してきた。

K君は茶目ツ気のある男で“今晚N老人
をおどかしてやるから銃声がしても驚か
ないでくれ”という“老人をからかうのは止
せ”というと彼は“調査地における危険性
を彼等支社の連中に思い知らしておかねば
ならぬ”という。

夕食を済まし暗いランプの下で雑談をし
ているときパンパンパンという数発の銃声
がした。K君が自衛隊に命じて発砲させ
たのである。彼は さもあわてたような
態度で“敵襲らしいが 攻め寄せてこぬよ
うに当方でも応戦の準備中です”よと報告
口調である。N老は おどおどして落ち
つかぬ様子なので気の毒になり“大丈夫で

すよ こちらには20名もおますから 攻め込んできたりはしませんよ”というが そのくらいの言葉でN老人の心は安まらなかったようだ 夜が明けると彼は取るものも取あえず張家口に引揚げてしまった。 気の毒なことをしたものである。

私共の班長であり大同炭田図幅調査の取締であるMさんが慰問かたがた現地指導にこられることになったので大同の山西旅館の主人に頼んで酒を入手して待った。 Mさんは自他共にゆるす左党の第一人者であったからである。 もう入手困難になった日本酒を5・6本も集めたので 久方ぶりに酔うことができた。 さて明けの朝になると宿酔で頭がずきずきと痛む。 Mさんも同様だろうから “今日はフィールドに出るのは止そう” と言いだされるだろうと心待ちにしていたら “出かけましょう” ときた。 そして曰く “酒飲みが酒を喰って宿酔で仕事が出来ぬ などと言われては申し訳ない” と。 私も渋々ながら出発の用意をしないわけにはまいらなかった。

私のフィールドには3カ所ばかり僅かながら清水の湧くところがあって 水筒の水などと違って冷たくまかった。 私はその清水の湧く地点を通るルートを案内した。 Mさんは清水の出る所では必ず其水を飲んで 顎のあたりに砂を着けてこられた。

そして曰く “清原君 君にはよいフィールドが当たったね こんなに清水の出るフィールドなんて他にはないよ” と。 私はふき出したくなるのをこらえ 真顔で “そうですか” と答えた。 清水の出る場所をえらんで通っているとは 神ならぬMさんにわかつう筈がなかった。

この調査でMさんに教わったことが2・3あった。 黒色の岩脈状の岩石がどうしても見当さえつかなかったのであるが ランプロファイヤーだと教わった。 名称は知っていたが実物を見るのは初めてであった。 次に2つの断層の前後関係がフィールドでよくわからないままに あやふやに図上におとしていたら “君この両断層の前後関係はどうなっているの” と問い詰められて返答に窮した。 間違っているかどうかは別として 地質構造を解析して図示する場合 あやふやにお茶を濁すようなことは許さるべきではないが ありがちなことである。 私は其後断層の前後関係には神経質な程気をつかうようになった。

この調査も終って窟子頭部落の穴居生活に別れを告げる日がやって来たのであるが 困ったのは2羽の鷺である。 4~50日もたった雛は立派な大鷺になって両翼を広げると 5尺平方ぐらいのおりに翼がつかえて 羽ばたきが自由にならないようになっていた。 おりの丸太の間から餌を入れたら行く ものすごい形相で爪を立て髪

を逆だてて立向ってくる始末である。 やつこの思いで取りおさえて木箱に押し込み北京に持帰り北海公園に寄贈した。

大同から張家口に出たお世話になった大使館に挨拶に行くと 外蒙方面の調査に入っていた K君とS君の2人とはからずも一緒になった。 大使館の当時の担当技師(課長?)は地質調査所から派遣されたBさんであった。 3人揃って帰ってきたのでBさんは私共の苦労をねぎらう意味で “一席設けよう” といってお下された。

当時の役人というのは 一般に気位が高く威張っていた者が多く 反骨精神の強い私には好感が持てなかったのであるが このB技師は ざっくばらんで庶民的でおよそ役人ばなれしたところに好感がもてた。 短いテーブルスピーチの中に 芯には強いものがあると感じた。 私は引揚げて調査所に勤め暫くして このBさんの部下として働く機会があったので 彼の人格に接することも多かったのであるが 柔和なものごし 茫洋とした風貌の氏のどこに こんなにも強い性格がひそんでいるのだろうか 不思議がる程 個性の強い一面をもっておられた。

調査帰りの3人のうちでは私が一番年長者であったので挨拶をしろという 私はただ “遠慮なく頂戴します” とのみ答えた。

9. 人肉の市と塩池の思い出

大東亜戦争も酷となり チリーからの硝石の輸入が断たれて困ったのであろう。

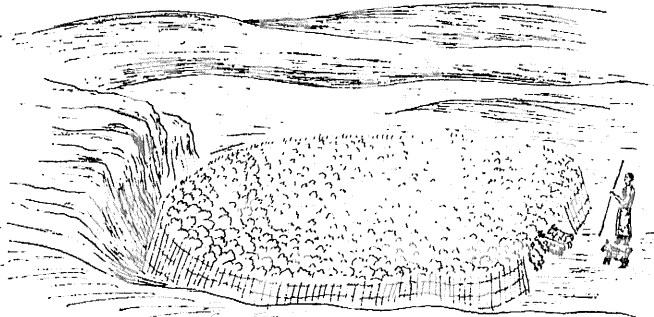
19年の秋の頃であつたらうか 山西省運城の塩池付近に硝石が出るという情報があるので 調査せよという軍からの命令である。 命令というもおかしいが 要請などというなまやさしいものでなかったことは事実だ。 審査役のYさんから私に行くようにとの命であった。 赤白珪石ならまだしも硝石と聞いては なんぼシンソウで押すといっても “はい 行きます” とはいえなかった。 私には見当さえつかない代物であり、ズブの素人が行くのと 少しも違わないからである。 Yさんは情報を説明して “それ自体が鉱床をなして産するものではなく それを含んだ土から製

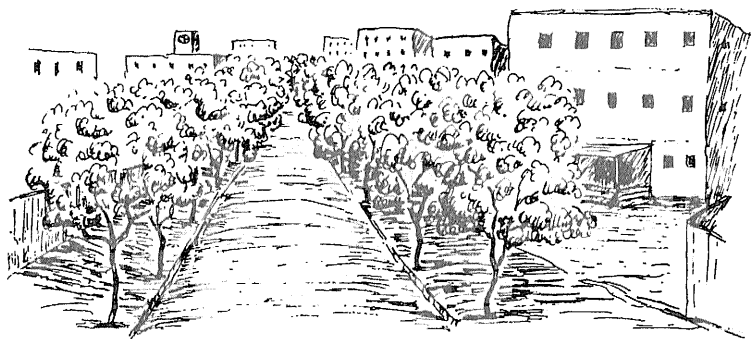
造するもので そうむずかしく考えんでもよい。 その状況を見てきてもらえばよいのだ” とつけ加えられた。

太原の山西産業本社の分析室からも分析係の人が行くことになっていたので 私は通訳のR君をつれて太原に向い 分析の運中と合流して一路運城に向って南下した。

運城は山西省の南西端 黄河が大きな「く」の字を描いて廻る内側の角にあたる処にある。 着いた夜は現地部隊の招宴でにぎやかにさわぎ 最前線にきている感じはなかった。 宿舎にあてられた日本人旅館は うす暗くて陰気な家だった。 通訳のR君が町を歩いて聞きこんできたところによると ある肉屋の店先に人肉が下げられていたという噂がもっぱらとのこと。 噂話というものはあまり当てにはならないが 10才ぐらいの子供の肉だなどといっていたという。 子供か大人か また男か女か等が どうしてわかるだろう。 鶏などの肉みたいに生前の姿が残っている場合にのみ それは区別できる問題のように考えられる。 いずれにしても真偽の程はわからないが 私はたまたま嫌な話として聞いた。 それでは まるで地獄そのままではないか 呑むしろ地獄などより下等な野獣と変わるところがない。 またR君の話によれば 肉屋の肉に犬の肉が混っているのは普通であつて それをいざごいっていたのでは肉は買えないとのことであつた。 運城は日本軍の最前線基地である。 唯今は小康を保っているが 幾たびか彼我の戦場として荒されたことであらうし 民心もまた その都度荒されずさんでいったことだろう。 私は人肉の噂を単に噂話として聞き流すことはできなかった。

問題のチリー硝石について情報を集めてみたがわからない。 ボウ硝のことはなからうかという。 早速その現場を見に行く。 塩が貴重な食料品であることは 大陸奥地の旅をすればいつも感じることで珍しいことではない。 当地もまたその例にもれず塩は貴重なものである。 幸いにこの塩池付近の表土中には塩分が含まれておりこの表土から塩を製している。 その方法であるが 1日に1回 家の回りの日陰





初夏の東交民巷

になる所や土堤の下などの土を掃き集める。1日1回というのはバクテリアの作用かなにかで毛細管現象がおこり塩分が地表に濃縮される時間的要求に基づくもので2回行なったとすれば塩の製成率が低下するので損をするというわけである。

この掃き集めた表土を水に溶かして漉し大きな鍋で煮ると食塩とボウ硝ができる。もう記憶が薄らいだのでどちらが先きに晶出するのであるか忘れたが塩とボウ硝とでは晶出の温度が違うのでよく分離ができるのである。彼等が必要とするのはその塩であってボウ硝は不用な副産物として塩池の中や縁に捨てられ一面に石灰をまき散らしたように真白であった。塩池というのが塩湖を意味するものと思っていた私は多少当てはずれの感でこの付近の塩池には水はなくボウ硝の捨て場になっていた。また付近の塩の製産情況から推しても塩池の水が塩水でないことは背かれる。また地理的にもこれは黄河の氾濫によってできた湖沼である時は黄河に続きある時は湖沼となって黄河より独立するといった性質のもので塩湖にはなり得ないであろう。

通訳のR君は“百姓からもらってきた”といって小犬程の狐の子をひいて帰ってきた。手を差しのべると歯をむき出して龔いかからんばかりのすごいけんまくである。その上くさくて可愛いものではなかったが大同炭田で鴛のひなといひこの狐といひR君は動物が好きらしい。この狐夜中じゅう奇妙な嫌な鳴き声をあげて皆の者を寝せないでとうとうR君も捨てないわけにはいかなかった。私にはこの小狐の嫌な鳴き声と人肉を売っていたという運城という所がさいはての町という淋しくもまた嫌な思い出の地として脳裏に残されたのである。

10. 満俺を探して静楽から嵐県へ

静楽県の満俺調査の掃略 敵襲を受けてから1・2カ月はぼんやり腑のぬけた人

間のように過ごした。山登りの連中が友人を亡くした山にまたのこのこと登りに出かけるように私共にもやっぱり街には用のない人間で山が恋しい。あれから1年余たった19年の某日Y審査役から“君は思い出が悪いだろうが前年度の関係もあり静楽と嵐県間の満俺を見て来てくれないか”との命を承わった。もちろん思い出がよかろう筈もないがYさんの命に“否”ということは私にはできない。私は行くことにした。踏査するだけで測量員は必要でないので若い助手のF君を1人つれて行くことにした。

山西軍司令部では昨年の事件を意識してか今度は作命乙を出してくれた。作命とは作戦命令のことで作命甲は戦闘行動の場合に出されるものであり調査の場合は一般に作命丙である。作命乙を出してもらったのは前にも後にもこれ1回であった。静楽までは例の如く糧秣輸送のトラックに便乗した。途中狼が1匹後をふり向きながら逃げて行くのがめずらしかった。作命乙ともなれば警備も充分で50人余の兵に小隊長が指揮にあたった。西馬坊鎮から嵐県に至る間は厚い黄土地帯で見渡すかぎり砂漠のような台地々形で基盤岩の露出するような条件のところはない。黄土の中交到って点々と拳大の満俺鉱礫がみられる。おそらく西馬坊鎮付近の満俺鉱床の連続があってその露頭部がこわれて風により黄土中に混じったものであろう。警備も充分であり暇をかけて調べるのはよいがこの深い黄土では手がつけられない。

砂漠のような台地を暫く行くとはるか前方に列を組んだ兵隊らしきものが目につく。私は“敵の行動に遭遇したと思ひこんで”小隊長に知らずと“友軍ですよ”と軽くいわれた。この付近が静楽の独立大隊と嵐県の部隊との警備区域の分枝点になるとのことで嵐県の部隊から私共の身柄受取りに向いてきた小隊長以下50余名の兵隊さん達であった。作命の段階が1段違ふとこんなにも警備が違うのかと驚

く程厳格に引きつがれて私共は静楽の兵隊さんに別れを告げ嵐県に向けて南下した。黄土の台地から下りたところは大きな川で河岸にみごとな礫岩層の崖があった。これまで風化して腐ったような岩や黄土のみを見てきた目には生き生きと目のさめるような岩肌である。拳大の礫が主であるこの礫岩は鮮やかな流理構造をなし礫そのものも楕円体をなして流理に沿って流れる如く連なっている。私はこのような礫岩を見るのは始めてのことであるがおそらく古い時代のものであるうということとは想像された。この岩肌へばり着いて離れようとしな私を見て1人の兵隊さんが何か有用鉱物でもあるのかと聞いた。私は首を横にふってやっと岩の下を離れた。

今度の調査行は何等の収穫もないままに嵐県につき部隊本部に入った。連隊であったのが旅団であったのか記憶にないが大きな部隊であった。我々には1室が提供され当番兵が1人ついた。おそらく将校待遇の通達が来ていたのであろう。

助手のF君はまだ徴兵前の若い青年だったが、40才にもなろうという当番兵に“兵隊さんお茶を持って来てくれないか”などと言っているので当番兵が出て行めした後で“老兵を使わずに君が行ってこい”と言うとF君は“もう直ぐ僕も兵隊にとられるので、彼等からいやという程ビンタをたたかれるに決っている今のうちに威張っておかねば”と言う。私は苦笑した。そのF君も間もなく兵隊にとられ“軍曹になったのでもうしめたもんだ”という便りを最後に戦死してしまった。荒れずりで動作の大きかったF君は新兵の間中たたかれ通しだったことだろうと思うとお茶くみぐみという文句を言ったのが可愛想で悔いられた。

1泊して明けの朝上級部隊からこの部隊に連絡に来ていた高級副官が司令部に帰るといのでその車に同乗してくれとの連絡があった。おとなしそうな老中佐のお伴をして河に沿う細長い谷を南下した。夕陽が沈む頃道はこの谷から離れて台地を越す態勢になった。道の前方右手の空地に羊の群が何百頭も集まって1人の老人がその廻りに桓根をめぐらしていた。面白い光景だった。運転手に頼んでその“宿泊”の様子をみる。みるみるうちに羊が呼吸できるかどうかと案じられるほどにかたまり竹のようなものをあんだ“よしず”は見事に円形の桓根を造った。寒い日には羊飼も羊の群の中に入って暖をとるのだそう。中国各地をずいぶん歩きまわったが山から基地に帰るのは初めてするのでこのような情景を見るのは初めてのことでこの詩情豊かな風景は私の印

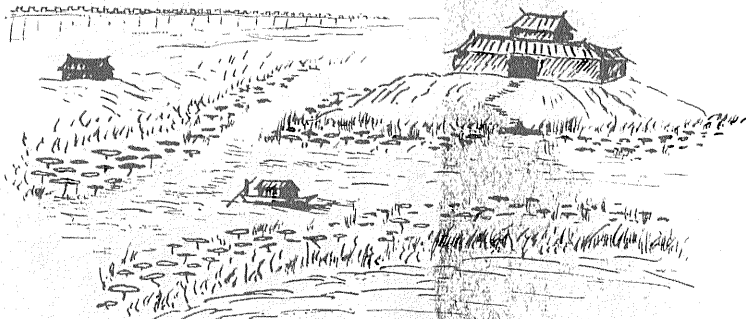
象に強く残った。

11. 六河溝炭田調査の思い出

昭和20年の春 北京の街はまだ寒かった。若い連中はだいたい兵隊にとられ 負け戦の色も段々濃くなってきた頃である。私は六河溝炭田の調査を命ぜられ 独りで京漢線を南下した。この線は何回も往復した道なので 地理には明るい。石門や順徳を過ぎて汽車は邱鄭に着く。粟飯を炊く間に50年もの長い栄華の夢を見たという中学時代の国漢の時間のことを思い出した その邱鄭である。武安の鉄鉱床はこの辺の奥らしい。新郷で下車 修武の方へ行くローカル線に乗り換える。

六河溝炭鉱はK社の経営で鉱長だったSさんは引揚げてからも何回もお逢いする機会があった 九州人で K本社にいた人である。初対面のとき そのKさんは私に酒はどうかとたずねられた。私が“大好き”だと答えると。“用度にカナディアンウイスキーをたくさん確保しておいたので遠慮なく申付けて欲しい。私も好きであるが忙しいのでお相手することも思うにまかせません”と。なかなかザックパランで気のよさそうな方であった。もう日本酒やビールなどは手に入らない時代でカナディアンの味はまた格別であった。私の宿舎に当てられたのは 古びてはいたがマントルピースのついた立派な洋式の部屋であった。おそらくこの炭鉱も 事変前は西洋人の技師などがいた山であったろう。ここで私は唯一人 4～50日を過ごすことになった。この付近一帯は黄土の厚いところで 岩石露出がきわめて悪い。それで先年だったか一昨年だったかに 通産省地質調査所の1技師の応援で物理探査を行なったことがあった。当時の物探はまだ試験時代？ ということだったろうか 私は出発までにその成果を聞かなかった。またこの炭田については 事変前に同地質調査所のM技師だったかY技師だったか記憶が薄らいだが 調査報文が出ており 地質図も添えていたのであるが 前記の通り露出が悪いので その構造形態をつかむことがむずかしかった。

この付近も治安の悪い所であったが 加えて日本軍隊の駐屯がなかったことも不安であった。警備は炭鉱で雇った自衛隊が1コ中隊ばかりいて 隊長や幹部には現地満期の日本人の人がいたように思う。ある日敵襲を受けた。こちらの兵隊が日本兵でないだけに心配も多かったが 幸いに襲撃は執物ではなかった。もし味方の形勢が悪くなれば 寝返りを打たれることは覚悟しなければならぬ。彼等は何も身体を張ってまで敵と戦う意味もなく義務も感じていないだろう。露出の悪いところ



濟南城内の遊園

の無意味な踏査にあきかきていた矢先ではあり 敵襲に対する不安感も手伝って 私は早めに北京に引揚げることにした。

私の北京の社宅は採鉱のN君と隣り同志であった。2人で連れ立って胡同（横町あるいは裏道）のアカシヤの並木の下を通りながら 私は右の目に目やにが着いている気持で 何回も手の甲でこすってみたがとれない。並んで歩いているN君に見てもらったが そんなものは何も着いていないと言う。おかしいなあーと思ながら会社の自分の机に向う なに気なく自分が書いている報告書原稿の字を左の目をおおって右目だけで見ると読めない。左の方はどうかと思って手を変えて見ると左は普通である。右の目の視力があやしいのだ。1日2日は不思議な現象と思いながらも大きな心配もせず過ぎた。1週間余過ぎた頃例の如く片目で試して見ると右の目では原稿用紙の字がまったく見えないまでになっていた。驚いて病院に行くことにした

社の表玄関を下りると槐の街路樹のよく整った東交民巷の通りである。右手の100メートルばかりの角に横浜正金銀行の北京支店があって その玄関の屋上に直径2メートル余の時計台があった 私は歩きながらその文字盤を例の如く片目でおおいだ。右の目では見えない。街のそこそこに立っている看板でも試してみたがやっぱりおなじだった。恐しい気持が しんとと全身にしみ渡る。私は六河溝炭鉱で飲んだウイスキーが悪かったのだと思った。支那という国は偽物の多いことでは定評があり 特に洋酒類にひどいことは 身をもって体験したこともしばしばであった。

あのウイスキーに違いないと思った。しかし私の容態を聞いたD病院の眼科部長は“メチル禍ではない”と断言した。各種の検査をしたがその病源を突き止めることができぬままに数週間を過ぎ 最初の頃は正常であった左眼も見えなくなってきた。電燈の下では新聞などは読めなくなった。羊の肝臓がよいと聞いては回教徒の肉屋に頼んで入手して食べた。食塩も砂糖も使

用してはいけないと言うので そのなまぐさい香が鼻について食べにくいこと。しかし眼をつむって食べた それでも視力は落ちる一方で失明するのではなからうかなどと考えるようになった。治療はただカルシウムやビタミンの注射をするだけで目そのものについては何とも手の下しようのないものらしい 不安な日々の中にも一応病勢の進行は止まり一進一退の状況をたどっていた。

頂度その頃会社では 総合病院をつくり傘下各社の従業員の健康管理にあたる構想があった。すでに一部の担当部長医師が本社に着任されており 眼科部長もみえて仮に診療室に当てられた1室で治療を開始してもらったので 私もD病院を止めて会社内の眼科に通うことにした。この部長先生という方は 内地では有名な先生だという話で 私も安心感があったが診察した後で眼球に注射するという ただの注射でも嫌であるのに眼球に注射とは たじろかざるを得なかったが “ままよ” と思って麻酔の湿布をしながら 何という薬の注射かと問うと“まあ素人にわかり易くいうなら食塩注射でしょう”と答えた。1日おきに右と左に注射をすること数回で両眼共に著しく視力を回復してきた。そして数ヶ月も治らなかった眼病が2週間あまりでほぼ完全な視力にまでよくなったのである。私は“名医”というものをしみじみと感じたのであった。

私の六河溝炭田調査の思い出は 私の眼病の思い出であり 名医の認識であると同時に東交民巷の槐樹の深緑が目にした思い出でもあった。

12. 濟南の思い出

大東亜戦争も愈断末麗の苦しみに近づいてきた。我々の調査なども悠長な考えは許されなくなり 北京から出かけて行くのでは間に合わないという気分になってきたようだ。北京の空にもB29が飛んで来たもちろん爆撃したわけではないが“いよいよ”という気分は強くなった 会社では濟